

学校における教育相談のあり方を求めて

——カウンセラー研修体験とその後の実践——

米田美智子*

I はじめに

私は常に生徒の内面を大切にしたいと願ってきたつもりであり、それなりの自負もあった。しかし、その願いや、自負がいかに甘えたものであり、「自分は先生である」という自己防衛に根ざしたものであったかを——もちろん、それは現在においても、将来においても克服されることのない課題として続くであろうが——学級担任として挫折した経験と、カウンセラー研修体験とが思い知らせてくれた。私はこの体験をとおして、あらためて、ひとりの人間として教師が生徒を理解し、育てるということはどういうことなのか、考えざるを得なくなった。

それにしても「出会い」とはなんと不可思議なものであろう。28名の生徒との出会い、カウンセリングの世界との出会い、私はこのかけがえのない二つの「出会い」を時を同じくして持つことができたのである。それをきっかけにして、生徒との人間的交流を求めて、学校カウンセリングのあり方を私なりに探り、実践して行きたい。以下はそのささやかな記録である。

II カウンセラー研修期間における私と学級(3年)(S47・4～)

生徒についての記録	私自身についての記録	考 察
<p>(2年時の実態)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・男子17名,女子11名 ・男子の集団は分裂状態にあり,リーダー的役割を極度にきらう。 ・女子は良きリーダーのもとにまとまっているが,人数,成績面から劣等感が強く,男子に対し卑屈である。 ・全体として無気力,無反応,人間的によそよそしいふん囲気であった。 	<p>2年間,ほかの学級担任の際,問題児2人に対する指導の失敗経験から多少の挫折感があったが,心機一転して生徒理解にとり組むつもりであった。</p> <p>3分の1は1年時担任した生徒であり,女子とのレポートには自信があった。</p> <p>努めて明るくふるまい,意欲的であろうとした。そして不安よりもそれなりの充実感があった。</p>	<p>2年間の挫折感情を受け容れることができず,それを抑えたまま新しい学級づくりによって乗り越えようとしている。従ってその意欲は自己をとりもどそうとする自分のためのものであって,生徒理解のための意欲ではなかったといえる。</p>

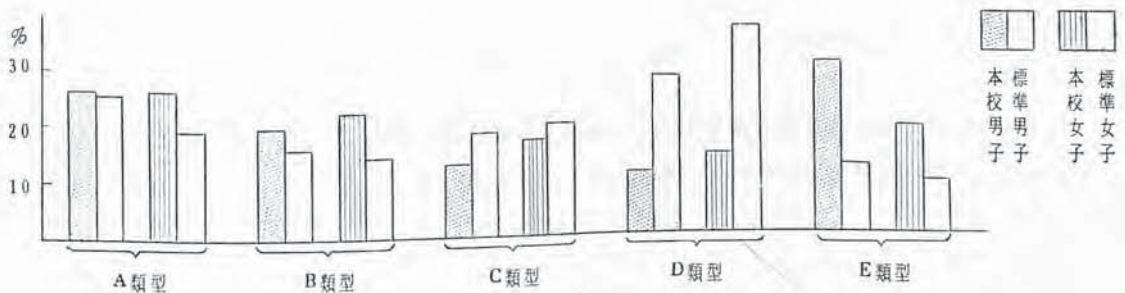
* 三条市立本成寺中学校

<p>第1期 (4月～10月)</p> <p>W(中位の成績, ミニコミ新聞, 4月) 「我々に狂師はいらない」</p> <p>K; 「みんな意地悪だ」(下, 孤立児)</p> <p>T; 「先生は理想家すぎる。オレ達は今のままでいい」 (級長, 6月)</p> <p>K; 「先生はオレに力があるというが無いから副生徒会長にさせられたんだ。オレはみんなから避けられている。ほおっておいてくれ」 (10月)</p>	<p>担任早々に, 生徒の拒否的態度に度肝を抜かれたが, じょう談口調で受けとめ, 放置する。生徒に接近しようにも手がかりをつかめぬまま, 学級のふん囲気づくりを呼びかけた。しかし, 生徒の反応は冷たく, 次第にあきらかな拒否反応になっていった。説得, 拒否の悪循環に気付いてはいたが, どうすることもできず, 不安と焦燥孤独感に悩んだ。</p>	<p>自己不一致の緊張状態は生徒の無反応, 拒否にあって, さらに高まり, その状態からのレポートづくり, 説得等は悪循環となるだけであった。自由な感情表現ができず, 不眠の傾向も出始め, 人間関係に対する不安が大きかった。</p>
<p>第2期(11月～卒業)</p> <p>I; 人知れず成績不振児の指導をする。</p> <p>T; 女子の副級長に仕事を押しつけるのを止め, きこちないが協力的態度をとり始める。 (11月)</p> <p>卒業記念としてテープ文集を提案, 途中投げやりのになったが, 協力者を得てやり遂げる。</p>	<p>研修がすすむにつれ, 自意識過剰の状態から解放され, 時に自分をちかす余裕も出て来た。また交換ノート等から反抗の裏にある弱さ寂しさに触れて, 彼らに対する親密感を覚えた。しかし自分には力のないダメな先生という意識は離れなかった。</p>	<p>研修の場で情緒的解放が行なわれ, またその意味もわかってくるにつれ, 自分の感情をありのままに受容し始めた。次第に生徒の内面もみえてき, 自由な自己表現をとり戻しつつある。</p>
<p>第3期 (卒業後)</p> <p>Iの手紙 (6月)</p> <p>「……今はスランプに陥っている時期です……ふと中学時代のことを思い出して少し書いてみました。なるべく忠実に書いたつもりです。そしてなんとなく先生に読んでもらいたい気分になりました。……」</p> <p>O(女子)の手紙 (10月)</p> <p>「……この頃, ノイローセきみで, 学校へ行く事の意味, 進路について悩んでいます。…書いているうちに, 自分の気持がまとまって来ました。…」</p>	<p>レポート用紙7枚に細かき字でぎっしり書かれたTの手紙は, 私を非常に勇気づけた。頭が良くて利己的で, 常によそよそしかった彼が暖かな柔らかい面をみせてくれたのである。</p> <p>明るく素直であったOは, 常に私を励ましてくれた存在であり, 彼女との文通は私にとって大きな喜びである。</p>	<p>彼らの手紙を書く動機は何であろうか。人は感情の表現を求めてやまないものだと思う。そしてその後に来る自己洞察を…。彼らが求めたのもそれではないだろうか。そしてそれはカウンセリングのねらいでもある。</p>

III Y-G性格検査の実施とその考察

学校として、特別活動教育実践の一分野として、教育諸検査の実施計画を作成、今年度より実施することになった。Y-G性格検査は2年生で実施し、私が担当することになった。本校では入学年度ごとに学年のカラーが著しく異なり、3年生は特別活動研究実践が入学時より集中して行なわれた学年ということもあって、非常に積極的、連帯意識もつよいのであるが、2年は素直ではあるがリーダー層が弱く、消極的の学年とされている。

1 性格類型の分布状況



(図1) 性格類型別、分布状況

⊕ 標準パーセントは、中井節雄「人事検査法」による。

分析

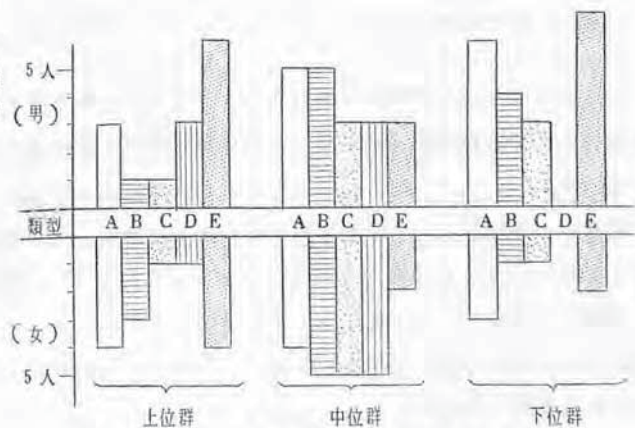
- ・ E類型の著しい高率傾向。—— 男子は標準の2.34倍、女子は1.95倍
- ・ D類型の低率傾向。—— 男子は標準の40%、女子は39%
- ・ 不安定、不適応傾向(B, E類型)は男子に、多くその男女比は標準で男子は女子の1.15倍、本校2年で1.19倍である。

2 性格類型と学習成績との相関

⊕ 成績はY-G検査を実施した月の1学期中間考査、5教科の合計得点順位により、上、下位群各30%、中位群40%の構成にした。

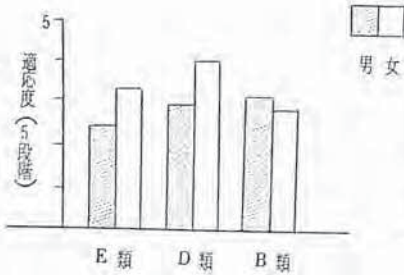
分析

- ・ 男女共に上位群においてE類型が最高率。
- ・ 下位群においてE類型が高率、D類型はゼロ
- ・ 中位群は男女共に最も安定している。

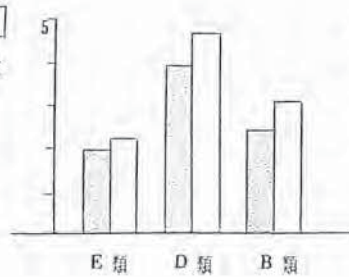


(図2) 成績群別の性格類型分布

3 性格類型と学校，友人適応との相関



(図3) 学校適応度



(図4) 友人適応度

性格類型と学校，友人関係に対する適応度の相関をみたものである。適応度を示すものとして，教研式，学習適応検査(AAI)の9，10の項を用いた。

5類型中，不安定型のE B類型と，理想型とされるD類型の3類型を抽出した。

分析

- ・男女共にE類型の適応度は最低を示し，特に友人関係適応度はD類型の1/2である。
- ・女子はB類型の学校適応度の1例を除いて，男子の適応度を1.0～0.18の差で上まわる。

4 ま と め

すべてに陽性で，バイタリティに富む3年生に比べて，入学以来，素直で明るい，集団活動に盛り上がり，欠く2年生であった。今回の検査はその弱さを，成績上，下位群におけるE類型の高率，友人関係不適応傾向という形で具体的に示してくれた。私達は7月の検討会において，この実態を直視し，特別活動実践による集団づくりと，その裏面をなすものとして教育相談的配慮による生徒ひとりひとりの交流を大切にしていかなければならないことを共通理解した。そして教育相談部としても，これを今後の実践の方向を示すものとして考えていかなければならないことを痛感した。

IV 教育相談活動の実践

1 第1期(相談室の開設とPR期 S48・4～5)

相談室は学校長の生徒第1主義という考えのもとに校長室が解放された。しかし応接室，小会議室，を兼ねた多目的の部屋であること，教務室に隣接しているためのマイナス面は大きく，今後の課題となっている。

開設前，相談について白紙状態にある生徒の実態を知るためアンケートを行った。それによると予想通り相談へのニーズは低く，担任に対しては20%弱，教育相談については3%であった。また，男子は相談に弱者のイメージを持っていることがわかった。そこで，プリント，全校集会等で，悩みごとを解決してもらいするための相談というより，それらをとおして生きる意味を自分でつかむための相談なのたということをもPRした。

2 第2期(希望相談と学級担任による定期相談, S48・5~8)

希望相談開設と同時に、カードは50枚近く持ち去られ、7名の生徒が一挙に申し込んで来た。カードの置き場所、申込み方法等に秘密厳守の原則をどう配慮するかに苦心したつもりであったが、申し込んでくる生徒は廊下で気軽に呼びかけるほどの屈託のなさであった。予想外の反応に気を良くしたもののいざ、やってみると私自身の未熟さはどうしようもなく、自己一致、無条件の肯定的配慮、共感的理解などということばと実際とのギャップを痛感した。現在までの来談者と相談内容の内訳を次に掲げる。

学年	性格	形	回数経過	主 訴	終 末 の 状 況
1	女	個	3 完	班長として、自信がない	話すことがなくなった。
1	女	集	2 完	ある男生徒が乱暴でいやだ。	気にならなかった。
3	男	個	3 継	英語が苦手、方法を教えてほしい	学習法の指導、やっている、2学期再び来る。
1	女	個	3 完	親にしかられ、学校不適應。	しかられないようにして友人とうまくいった。
2	女	集	3 継	タレントになりたい。	終始安定した状態のまま決意変わらず努力中。
2	男	個	3 継	ある友人がうるさい。	友人から家庭内の不和の話へ。
3	女	個	1 完	試合前なのにクラブが不和。	試合直前の不安定な気持を話して終わる。
3	男	個		?	ひとりで解決したからと取消し。
3	女	個	3 完	なんとなくおもしろくない。	よく話し、洞察に至らぬうちにクラブに熱中。
3	女	集		?	解決したとして取消し。

5月、学級担任による教育相談を企画、6月と7月、2回に分け、計5日間にわたって、全生徒対象に行った。もちろん、担任による教育相談は日々の実践の中にさまざまな形で行なわれているのだが、全校体制をとることによって、生徒へのより一層の意識づけをねらった。しかし、部活動のシーズンと重なり、時間を特設することができず、担任の負担増となってしまった。第2回目を希望する学級担任もいるがその効果についてはあいまいな反応が多かった。それらをふまえて、第2回目については、さらに条件整備をし、学級担任の意向に沿ったものにしなければならないと思っている。

3 第3期(希望相談の停滞と呼び出し、委託相談の開拓, 48・9~)

希望相談開設と同時に申し込んだ生徒は2~3回の面接で、今まで気になっていたことが気にならなくなったという形で次々に終了していった。現在継続中の3人も、私としてはさして相談の必要を感じない、明かるい素直なタイプなのである。一時的盛況が過ぎ去った今、改めて教育相談の第2の方向を考えなくてはならないと思った。

いずれにしても希望相談の限界は早くから感じていた。極論すれば気軽に相談室へやってくる生徒はそれだけで心配ないといえる。問題はY-G検査の結果も示すとおり、成績上位群に集中している不安定傾向の生徒にあると思う。彼らは受験競争に自ら積極的に参加しており、ほとんど無自覚のうちにその弊害を受けている層ではないだろうか。そして気軽に相談に来るには、その自意識が許さないタイプなのである。その顕著な例を昨年担任したI, T, W, Kなどにみるように思う。

3年にくらべ、消極的で集団意識の低いといわれる2年生のレベルアップのためにもそういう生徒をこそ人間本来の連帯の場で活躍させなければならない。それは運動会にみせたあの集団のエネルギーに象徴されるように、特別活動領域の集団活動とおし醸成されるべきものだと思う。しかしその裏面を

補強するものとして教育相談の果たす役割は大きい。現在の私はそう思うだけで全く自信がない。けれども拒否されても不愉快な気分にならないですみそいなので、手のつけられそうなところからやってみようかと思っている。

そこで一番問題になることは、相談のきっかけをどうつかむかということと、学級担任との関係である。幸いなことに本校の場合、後者の問題については、学級担任が希望相談を奨励する等、共通理解がすでにできているので、主として困難は私自身の側にある。呼びかけをする私自身の人間性、私の技術が問題なのである。そのきっかけはあくまでも具体的事例の中に求め、人格的なものであってはならないと思う。

9月に、自己中心的で外罰傾向の女子に、呼びかけたが見事拒否された。現在、2年の学年委員長であるが、学級で排斥されがちのMと演劇上演についてのトラブルからそのきっかけをつかみ、現在継続中である。役割決定上の手づきでのくいちがいを許せないとして感情的になったが、時間的に自分の感情を放棄せねばならない場に追いこまれ、自分で決めたこととして1つの方向を選んだ。この場合以前の私のように説得に乗り出していたらますます彼を自己防衛的にならせていたと思う。説得されたのではなく、時間的条件と学年全体への影響を考えて、自分が選んだのだという事実が誇り高い彼を、今年劇の上演に駆りたてている。しかしその誇り高き自意識のために彼は人一倍傷つきやすいのであり、いつか洞察によりそれはとり除かれなければならない。とにかくあせってはならないと思う。

さらに考えていかねばならないのは、学級担任に委託相談を呼びかけ、その気運をつくることである。しかし、自分の力を考えるといつもちゅうちゅうせざるを得ないのだが、地道な実践を積み重ねることが何よりの呼びかけとなるのではないだろうか。

それにしても相談の時間にいつも苦勞させられる。教師も生徒もまとまった時間がとりにくいのである。学校行事、部活動、会議等で中断されると生徒側の気持に影響が大きく、相談活動に大きなマイナスとなる、休憩時間の利用は避けたいのだが現状ではやむを得ない。

V おわりに

私にとって、カウンセリング研修は自己変革の過程であり、人生観さえいつか変えさせられたほどの体験であった。そして、今まで無縁であった宗教的世界までが自分の前に開かれようとしているのを感じる。カウンセリングの奥にそのような世界まで秘められていたとは驚きであった。

これまでの実践は生徒のためというよりすべて自分自身のためであった。自分がいかに強くなれるか、いかに充実感を得られるか、それに尽きるようである。

とにかく人間とは不思議なものだと思ふ。人は無意識のうちに何かを求めて生きているのであり、それをどこで、だれが授けるのか知らないが、いつか自分で悟っていくのだと思ふ。しかし、それには、今の学校、社会はあまりにも競争が多すぎる。その芽を摘みとってしまう。小さな自分がこんなことを考えてもしかたがないが、自分の周囲にいる生徒たちを理解しあえることは楽しいことだと思ふ。